

サンプル

「あら、コウじゃない？ 今帰りなの？」

「え？」

耳に響く声に思わず顔を上げるとー。

1台の黒塗りの車が停まっており、後部座席の窓から顔を覗かせる光がいた。

「光様？ こんな時間に……」

「お父様とパーティーだったのよ。今日はその帰り」

パーティーって……。

彼女は財閥令嬢だ。

当たり前の単語だが、薄給の幸志郎にはまったく縁のない言葉に住む世界が違うとまざまざと思い知らされる。

「コウはお仕事だったみたいね」

「はい……。少し残業を……」

光と会話しているだけで、さっきまでの憂鬱が吹き飛び幸せな気分になる。

やっぱり、自分は彼女の奴隷なんだと思う。

「そう？ なら少し遊んであげるわ。ちょうど退屈なパーティーでストレス溜まってたのよ」

そのストレス発散に自分を使うと当たり前と言われたのに、幸志郎の心の中には屈辱よりも喜びがあった。

「ありがとうございます。光様」

「ほら、乗りなさい。服は着たままでいいわ」

ガチャ、とドアが開けると、シートに足を伸ばした光の姿があった。

白いドレスと薄い化粧を施された光は年不相応の大人びた雰囲気が出ていて、幸志郎の目にはまさに女神の様に見える。

「ほら、ここよ」

愉悦に笑みを浮かべながら足を浮かせる光。

白いドレスに合わせた様な白いヒール。

「失礼します」

車の床とヒールの間の隙間へと身体を幸志郎は潜り込ませた。

まるで自分自身が車の床になってしまう様な錯覚を得れる光景だった。

そのまま身体をくねらせ、靴底へと自分の頭を近づけていく。

(あ……)

光の香水の匂いが濃くなった瞬間だった。

「ふふ！」

そんな幸志郎の顔を光は無造作に踏み潰したのだ。

グリグリとヒールをねじ込む様に力を込める光に幸志郎は歓喜の涙を流した。

「ねぇ？ どうかしら？ ヒールのお味は？ いつものローファーや素足よりもずっと痛いわよねえ？」

愉悦に歪んだ表情を見せながら光は踏みつけながら訪ねる。

もう、答えなんて分かりきっているだろうに。

「はい、でも幸せです！」

それでも答えてしまう幸志郎の頬をヒールが撫でる。

「ふふ！ 本当に気持ち悪いわ。ただの床なのにね？ 家で今日は徹底的にいたぶってあげるわ。コウは自宅に帰れないからね？ ふふ、犬用の檻で過ごして、もっと私に飼われる立場だと自覚させてあげるわ！ あははは！」

「はい、ありがとうございます。光様」

もう、幸志郎の頭の中には奴隷から解放されるなんて考えは微塵もなかった。

ただ、光に飼われる事だけが幸せだった。

光に責められ、加奈枝に追い詰められて
疲弊した精神は光に依存することで救いを求めるようになってしまったのだ。

「ふふ、楽しみにしてなさい？」

嗜虐的な微笑みを浮かべながらシートに深く座り込んだ光を乗せ、車は滑るように道路を走っていくのだった。



光の家――屋敷に連れてこられた幸志郎。

「ふふ、今からコウは四つん這いで来るのよ？」

ムギュ！

シートから立ち上がった瞬間、幸志郎の顔に乗せられていたヒールに全体重がかかり、鋭いヒールが深く幸志郎の顔に食いこんだ。

「は、はいいい！」

悲鳴に近い声で答えた幸志郎を一瞥し、光は優雅に車から降りる。

その後、顔に靴跡をつけた幸志郎は這うように四つん這いで車から降りたのだった。

「お帰りなさいませ、光様」

幸志郎の視界にメイド服の裾と黒いパンプスが見えた。

本物のメイドがいるなんて、やはり住む世界が違う。

圧倒的な屋敷や使用人などを見せつけられたコウはボンヤリとそんな事を考えてしまっていた。

「ただいま、翡翠。ペットのコウよ」

「これが新しいペットですか？」

「そうよ。コウ、ご挨拶なさい」

脇腹を軽く足で小突かれたコウは反射的に土下座した。

「光様のペットのコウです」

「光様にお仕えする翡翠と申します。貴方の世話をすることもあるので、よろしくお願いいたします
す」

ドシッ、と黒いパンプスで土下座した頭を無慈悲に踏みつけられる。

顔も分からない女性に頭を踏まれている屈辱がジンワリと幸志郎の身体を熱くさせる。

それは怒りではなく、心地よい熱で……。

そのまま顔を見ることも許されず、翡翠と名乗った女性はどこかへ行ってしまう。

「こっちよ。ついてきなさい」

土下座していた幸志郎の顔をヒールでつつき、光は移動を促した。